



藻  
鹽  
袋

中村俊定文庫  
文庫 18  
328  
2



和漢三才圖會 寺島良安 先生撰 全十冊

博物筌 全部七冊 合本一冊

天地ノ間ニアラユルノ年歴来由ヲ夥シルニ以テヨ  
波ニ分テ其深源ヲ見タリ時即時ニ見エヤスクス  
右ノ三才圖會ニヒトシキ書ナリ

妙術博物筌 全部七冊 合本一冊

此書ハ又々至テ人家ノ重宝ナル本ニテ日々  
入用ノ事ヲモラサズアツメ智工秘傳ヒミツ秘  
術秘法ノ妙茶等コトクイロハ分ニイタレシ  
カヤウノヲニテモサツソク間ニ合オクニ鎮火用心  
車トウレテ火災ヲノガレ大切ノ事ヲシルセリ  
此一事バカリニテモ御所持ナサルベキヲ前ニシ  
ルセシ博物筌ヨリモ大ニミサレリ

日本歳時記 貝原先生作 全部八冊 合本四冊

正月門松ヲ立ルヨリ年ノヲハリ節分等ノ事  
ニテ年中ノ事トモノコラスアツメテ其来由故実  
等ヲアツメテコトク和漢ノ書籍ヲ引テコレヲ  
考ヘ四季ヲリクノ養生ノ法物ノタクハヤウ又ハ  
草木ノウエヤウニテラクハツメタル書ナリ

大坂書肆 古文字屋市兵衛板



藻塩袋之二

四季混雜



社頭花	芭蕉翁	夜明蓮	和散才立志
國境筍	釣月堂一漁	老木樓	凌雲亭花千
花使	一貴閣山里	早苗	采山沾涼
山吹	江口隨意	雲中鷲	祐川竺梅五
師走鯽	荒木惟善	唐土月	涼波金草周
走炭	河曲一蜂	夕立牛	僧百二

藻塩袋之二

大成正字通 新撰所増 益之要目

セイジ 正字 點畫ヲ正シ 誤字ヲ弁ズ

クワンレヨク 官職 唐名ノ相當 ヲ側又下ニ記ス

キキ 季寄 連非用ル景 物ヲ分チルル

チシダウギヤウ 年中行事 ヒトセノアヒダオチハルノ

ヨウジ エウケツ 用字要訣 モニレノツカヒヤウノワケ

セイゴ 成語熟字 二字ニツケテツカフモシ

イミヤウカン 異名漢字 コトナルナカラニツカフコト

カカヒ 假字 音訓トモニ カナツカヒヲ精 改ム

チシ 枕詞 和歌ニ用ルヲ 各其下ニ記ス

ヒヤソク 平仄 文字ノ傍ニ 悉ク平仄ヲ附

チシ 年中祭 朝廷ノ公事寺社年中祭 會ノ月日ヲ悉クケルル

オシヨミ 同訓ニテ其ノ異ナル字ハ其 訣ヲ記メアテ字ヲ用サルヲ示ス

シシ 經史詩文尺牘ニ用フ語又 其熟字ヲエラシテ誤ラ 付テ博クコレヲアツム

シシ 事物品類ノ異名雅稱又 漢字正名スベテ出ルノ正ヲ 摘テ詩文ニ用フヲ示シテ附





風尾花	喜多東巴	老更衣	猪鼻素谷
雪間菘	些計菘沾雨	楠金記	白雲窟沾川
蒙家梅	探春場雲岫	冬川鶉	采山沾涼
猪名野郭公	春曉檐一瓢	待子規	二宅沾室
初音梅	賢常菴壽躰	鳴滝堂	高橋也川
柳滑水	裴太郎未登		

藻塩袋之二

菊岡采山著

仔細小ま〜〜

何乃木のくれとを〜〜白ひのり 芭蕉

○泉集 万葉文系の日よめる 西行法師

何木のれりあすこゝろ〜〜海月

○丹宮 三座 天照皇太神 左天手カ雄命 右栲幡千千姬

○神武天皇造帝宅於檀原時以來 天照太神鎮座于  
 内裏 三種神宮 奉安 至崇神天皇六年 元五百三 十年後 喪同殿和州笠縫  
 皇立神籬使皇女豊鋤入姬命護之内裏則更作三種神  
 宝安之為永代宝祚乎護其後倭姬命相代勤之任神勅

遷幸諸國處凡十四度矣日本記

○垂神天皇二十六年十月甲子鎮座以來為不易宮所

○五十鈴川 涉山の西にありあり中流に宮治流あり

○新古今神祇 春宮推太夫之繼 神風也いそ川浪投去るは中流にあり

○風雅集神祇 之位後成 後治とありす川のまがひをあらけよ松の石枝

○外宮 豊受皇太神 瓊々杵尊 天兒屋根命 天太玉命

○崇神天皇三十九年遷幸丹波吉佐宮時豊受太神降

神於一處之神諭勅大佐し命奉迎之二十二年九月十

六日遷宮山田原且託宣曰先祭豊受大神後可勤仕我

宮也因茲于今講祭事以外宮為先

外宮、内宮建座より四百八十二年後なり

○兩太神宮 祭主一人 祢忍官姓ハ大中臣 在京崇兩宮之大要

宮司三人 大官司少司 推大司姓ハ大中臣 又奉祭東内侍所事

祢宜姓ハ波會氏 長官内外三人 十人中任一ノ祢宜ト者是ナリ

推祢宜内宮ハ荒木田 物忌 大内人 小内人 各教人姓ハ 彼此

○斎宮 多氣郡にあり多氣神と云或竹の社と云 宗神帝の皇女豊御入彦命太神宮の杖代より後垂仁帝の皇女倭姫

修に祈まると言ひて八尋の檜屋を建八千と娘命より太神の所衣  
と成しめ給ふなりて核敷と号又破宮と云而後景行高皇女五百乃  
皇女相代と勅せり改て祈まると言ひて此に依り承代、の天子  
内親王の末妹と云う此子居りて内親王なるは内親王の依候の女  
と身ひらる物なり後醍醐帝に於て累年昔に及女祥子内親王  
より以後、祈まると言ひての法法如し

乙卯月三日のあつち上野お大陣の傍  
まのまのののほのほのほのほ

蓮花とほくまきと夜明外 立志

○天木集 五女のまのまののころ集にまのまの

六ほのまのまのの光のなるまの 俊成如に

○新撰利華 此子、白蓮と花とらふ西天竺のまのまののまのの  
花さくらのまのまののまのまののまのまののまのまののまのまのの

○李太白採蓮曲云若耶溪傍採蓮女笑隔荷花共人語  
日照新粧水底明風飄香袖空中舉岸上誰家遊冶郎三  
三五映垂楊紫駟嘶入落花去見此躊躇空斷腸矣  
○白虎通云鐘言動也陰氣事ヲ用万物動成ス  
○五經通義云鐘秋分音也○月令章句鐘十二月声主  
○新拾遺集 乙卯のまのまののまのまののまのまののまのまのの  
東嶽のまのまののまのまののまのまののまのまののまのまのの  
よみて寛永寺と号ス中堂、元祿年中の所造堂 三十八間  
長十五間 横十八間 本堂、東山院勅筆 東山院勅筆  
中門寛永寺額 後水尾院勅筆 吉祥閣額 云并法親王震輔  
まのまののまのまののまのまののまのまののまのまのの  
夫木 法眼度融

○兩大師 一月一院交代 慈惠大師ハ本土江列波井郡の人  
 父ハ本津氏女ハ物部氏シ 諱良源 寛和元乙酉正月三日以  
 寂ス于時七十四春 元三大師ト云 慈眼大師ハ本土真列今所  
 高田御義院の末子ト云人其氏ハ田江氏姓也 其年モ亦ト云  
 一及室門ヨシク知レテ知レテト云 諱天海 寛永二十癸未十  
 月二日寂百三十余歳 慈眼係 民部法眼兼 慈眼係 法眼探出兼  
 ○不忠池 禁江四觀の湖水浪靜 荷葉多水面をさく  
 ○武藏風土記云 篠輪津池 貢 鯉 鮒 鰻 魚 鳩 雁 鶴 鶺鴒 鴨  
 等 周行三里許程 旱日水不涸 霜雨不為害 初雨兩人于  
 干 茲所祭 瀬織津比咩也

筆此河内へ通ふ垣根の如 一漁

○國境 三十四代用明帝の御宇 五十七歳七道と定ニ三十四代

推百帝の御宇 國々分 四十代天武帝の御宇 法  
 の境と定ニ 五十四代天武帝の御宇 六十六代國子分

○岨川 岨百そ 法と定ニ 岨川と定ニ 岨川と定ニ 岨川と定ニ  
 大進

○夫本集 おやれおまびらしの人ハぬさけけを  
 竹の子はれ先ももめりし 匡衡

○詩拾ニ 箏詩 王元之  
 數歩春畦獨歩尋 送犀抽錦真森森  
 田文老去賓朋去 拋擲三千玳瑁簪

○百聯披竹筍初生 黃犢角 蕨芽已作小兒拳  
 ○よと笛吹くよと 花のけりありありとやとくらしよとくらし

行きたるゆゑにさあけにけり人くさきとぬれをのあい行るに  
 くのあてんとくぬらうあをつとまきりとりとらとまつくもよとく

ふむ一折をてし秘らきあるがこのまうまき

うき御もつせれもなうこれ竹のこもそそ死  
ものありありあるとおてあしての路いりあてこらま  
ひて何いそふいたしきとらう〜とふあつとそまはす

○伊勢物語云平治少僧正にさかたもまのひらみあておん  
あてそは内のおたあまのいづのまきかすつとそまらうこり  
おれとひまの女わ〜とつゝ会ら〜とまき〜が〜やりおれを男  
あ〜かありわがらよあんとふひ〜つひてせんとの中に  
あまをぬかあら〜あまの月〜そそまてこの女〜あ〜は〜  
〜してららあうあて

伊あかも身付を〜浪たつこふあまのあをるなつあんと  
とあ〜けのまき〜てあ〜りあ〜くあ〜〜とあ〜むてか〜ら  
もい〜とあり〜まひり

老本〜肌子あ〜く〜ゆ〜ら〜ら  
淺雲亭  
花千

○文明語集 考ふあまのさげを咲けの花の色子

あがた〜さ〜さ〜ひ〜り〜ほ〜く〜お〜ら〜ら

○伊勢物語和氣郡山越村了恩寺に十六日橋とらふ

ひひせとそたの林は中にあり毎年正月十六日に飛ん  
た人をもとつ日橋とよみひ〜は〜のよ〜とそすの病わ  
至実〜の橋ありあかを後よ及んで長喉花もんせよ音敷  
八旬よりあられをけ。長喉とらふもあ〜〜と根か〜らひ  
とそと花あま〜は〜るは正月十六日〜とそ〜ら〜〜毎の  
正月十六日子に御開〜し 故事因縁尺

○本朝列女傳云上東門院南都ノ東園堂ノ前ニアル  
八重櫻ハ天下ノ名花ナレハトテ興福寺ノ別當ニ才

ホセテ禁庭へウツシ取玉ハシトアリケルニ辭スル  
詞ナリテ其木ヲ掘リ車ニ載セステニ禁中へ石ル、  
トコロニ眞福寺ノ僧徒等コレヲイキトアリテ吾寺  
ノ靈木ナリイカニ女院ノ仰望シト云トモ外へウツ  
スヘカラス罪ニ行ハル、是ヲト、ノニト桃ケレ  
ハ女院聞石是レ妻カ誤リナリ衆徒ノ申トコロ風流  
ニ鬚ヤサシトテ感ニサセ玉ヒ伊賀国余野庄ヲ寄ラ  
レ毎春花ノトキ垣ヲ彫シ七日宿直ニテ守ラセラル  
ソレヨリ余野庄ヲ花壇庄ト申シケリ 南紀 矣

種遠——伊賀余野庄の蝶の花使 山里

○千首 題 ス花使 ヲラ 弟 ハ花 カさ リあり とや らく 花の  
出る のと はは らる の使 ナラ ん 為尹 マ

○古今真名序云至有<sub>レ</sub>好色之家<sub>以</sub>此<sub>ヲ</sub>為<sub>ス</sub>花身使<sub>ト</sub>

○著聞集云河内<sub>ノ</sub>室如<sub>ト</sub>と云<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>府判官代<sub>ト</sub>ヤウ<sub>ト</sub>の  
お<sub>の</sub>ち<sub>ノ</sub>き<sub>ノ</sub>もの<sub>ナ</sub>り<sub>を</sub>る<sub>日</sub>我<sub>より</sub>き<sub>き</sub>女<sub>房</sub>を<sub>お</sub>と<sub>び</sub>け<sub>け</sub>  
能<sub>く</sub>と<sub>る</sub>の<sub>う</sub>ち<sub>に</sub>お<sub>の</sub>ち<sub>に</sub>ん<sub>ら</sub>り

人<sub>は</sub>は<sub>ら</sub>る<sub>も</sub>や<sub>ま</sub>る<sub>と</sub>お<sub>の</sub>ち<sub>に</sub>お<sub>の</sub>ち<sub>に</sub>ん<sub>ら</sub>り<sub>を</sub>  
女<sub>め</sub>て<sub>く</sub>ま<sub>る</sub>ひ<sub>ら</sub>る<sub>は</sub>人<sub>の</sub>心<sub>の</sub>あり<sub>お</sub>と<sub>る</sub>の<sub>ひ</sub>ら<sub>り</sub>て<sub>お</sub>と<sub>る</sub>  
あり<sub>き</sub>き<sub>き</sub>す<sub>き</sub>す<sub>き</sub>もの<sub>ふ</sub>そ<sub>あり</sub>ける 袋中紙にも見

○昔劉子卿ト云人アリ庐山ニ居テ学道ス嘗テ花房  
漸ク綻ヒ馨香山谷ニ亘リテ薫ス雙ノ蝶アリ五絲目  
ヲ眩カス甚タウルハシク大廿燕ノ如シ花ノ上ニ翩  
翻トカケリ集リテ花葉ヲ啞フ其ノ狀予愛スヘシ其  
夜ニテ女子アリ來テ云君既ニ花ヲ愛シテ心ヲ慰  
ム此志ヲ感メ來リテ相諧フ胡蝶ノ遊フニ准ヘテ君

三葉草

七



亦意アレヤト劉子卿是ヲ聞ニ聲ノ文世ニ比ヒナリ  
容ノ端ニキニ心動キ倡ヒ入テ歡ヲ極ム矣六朝錄ニ見  
○梁ノ夏侯亶性儉嗇ナリ妓妾數十アリ並ニ被衣ナ  
シ客アルゴトニ常ニ簾ヲヘタテ、樂ヲ奏セシム時  
ニ簾ヲ謂テ夏侯妓衣ト云 活法

わづかのころ振履の里とて

彩衣をくばもうへりく早苗うね 采山

○續千載集 凡そいせも多羽山小田の松うけ  
みとのせそへてとる早苗うね 法印定西

○東坡頌王晋卿畫後

醜石半蹲山下虎 長松倒臥水中龍

○百聯秋 山影倒江魚躍岫樹陰斜路馬行枝

山吹や色乃唱へも 空なる歌 隨意

○聖武天皇の御宇奥列小田と云ふあり初々令汝よりを  
大伴家持のあり ともらるゝの清代さくんとあつるなる  
みられくゝいよあつれをれさく

○菰原定家つ五色のわ秋の黄色子

枝うの守屋の吹花ありてふうぬのあま波をこえやる

○連集良材云 良峯宗貞若うり一時好色なうひあふり  
帝の御をあらんと思ふ人后のまぬりして山吹色の所衣  
を川あきけ 御を康の中よりとてせ給ふ宗貞あまを  
まうてあまはとうをまうていともあふぬあま 時宗貞  
山吹の飛方ぬねーやれ同へと春をくらかーけ  
とあめりれを帝清教とていぬーけりて宗貞が中へ

なりをん物りとのふとをまらうも勅勅なくいふく汚氣色  
よありきり悔りあるゆふは奇を子の素性よりせりをねり  
ふのふ心吹とふをねらうとわ物よりよをなすはせり

私云以帝ハ仁明天皇し宗貞ハ僧正通昭乃俗名ハ宗貞ハ仁明帝  
乃近臣なりし大和物産よりなり帝ハおん意をもちて御薨  
送のあまらるる初瀬にたてまつりておのれをたてまつりて  
清れあて小町におあせりておのれをたてまつりて御薨の  
御終の旨致上人とも御服ぬきて後するよ河原にゆきし  
皆人ハ花の衣をぬきまらるる答のあはれよかりきりしせよ

と物の衆にきてあやまき童一々巾おせりるるんを  
良少將のまをりておのれをたてまつりて御薨の  
よ通昭とせしとまらるるは奇古今集子入

○老子五色章第十二

五色令人目盲五音令人耳聾五味令人口爽馳騁田獵  
令人心發狂難得之貨令人行妨是以聖人為腹不為目  
故去彼取此

○法華經普門品云若有百千萬億衆生為求金銀瑠璃  
碑磔碼碯珊瑚琥珀真珠等宝

○智度論云一切宝中命為第一

○楚書曰楚國無以爲宝惟善以爲宝舅犯曰七人女以  
為宝仁親以為宝 大學

は角と足ととらりいなる雪此宝 梅五

○一時正徹東福寺より京なる種穀よりゆき五條河原より出  
らるるけり湖の香いとあまらるるけりけり

為きててせ井たるるはつ終のをの羽の守るべき  
 とよみけの楮紙のその膏のまじ定處のありぬひ一そのま  
 よみぬをたきててせ井たるるはつ終のをの羽の守るべき  
 まつての目正徹ありぬふ物かねをたきててせ井たるるは  
 終の守るべきはつ終のをの羽の守るべき  
 ともぬすむかうはつ終のをの羽の守るべき  
 たり故に定處のまじり人むれせり 本朝語園 正徹に世人徹書記云  
 ○拾物論云 驚慈林棲朝出 挿魚鮮而食 夜歸宿 其処百  
 千為群

替礼此終のはつ終の走難 惟善

○史記曰黃氏情注云情ハ女婿ナリ東洛ノ間替謂テ  
 情ト云○女五不取 逆家子不取 乱家子不取

世有刑人不取 世有惡疾不取 喪父長子不取

○三不去 有所取 無所歸 不去 與夏三年喪 不去

前貧賤後富貴 不去 ○七去 不順父母 去 無子 去

淫 去 妒 去 有惡疾 去 多言 去 竊盜 去

○三從 在家從父 適人從夫 夫死從子 以上礼記

○貝桶と嫁娘最上の笠物とすなり其貝に至宝之法の  
 宝の文をその貝の字と作しなり蚌蛤同類なり形異し  
 長き者ハ通蚌 圓者ハ通蛤と云蚌ハ從中 蛤ハ從谷 形  
 貝にして日月の像似しなり合弄に陰陽とたりし  
 わり陰の方ハ凹 陽の方ハ凸し其方を含むる則ハ是  
 陰陽の理あり故に嫁娘の先をあきて一の笠物とするなり  
 其桶も六角の形なり天地四方の合し又婚姻食物の何れかに  
 蛤をハ縁すも陰陽和合の謂し又嫁女の素鞵と云ふる

死出の如きの表示して心教の象にかゝるぬらりあふれは事  
とに又上服に搗深と用ひるいふゆかり深出さず赤くまき  
色し赤色は火黒色に水し火まののりたる色少く人間の水と  
暗の程し水後びもその水と暗の表示し搗深は搗列候广  
那印南野の軍より深出さ藍律深く

○昨走 十二月廿一日に法家小佛の事とあひて厚味  
深く干れ若く海のかちとる事なりぬれく色に象をかひる  
○辨 本綱辨 唐韻云大者有毒食之救入今無識者  
和名波万知は魚六月其小なる五六寸の時津波海より小  
西國より和加奈と号九月より至り一尺なる眼白と号し  
十月より二尺あわす白と号し東はく伊奈太とのく仲冬に  
三四尺大なる五六尺足を辨と号す丹後出雲と上赤と号す

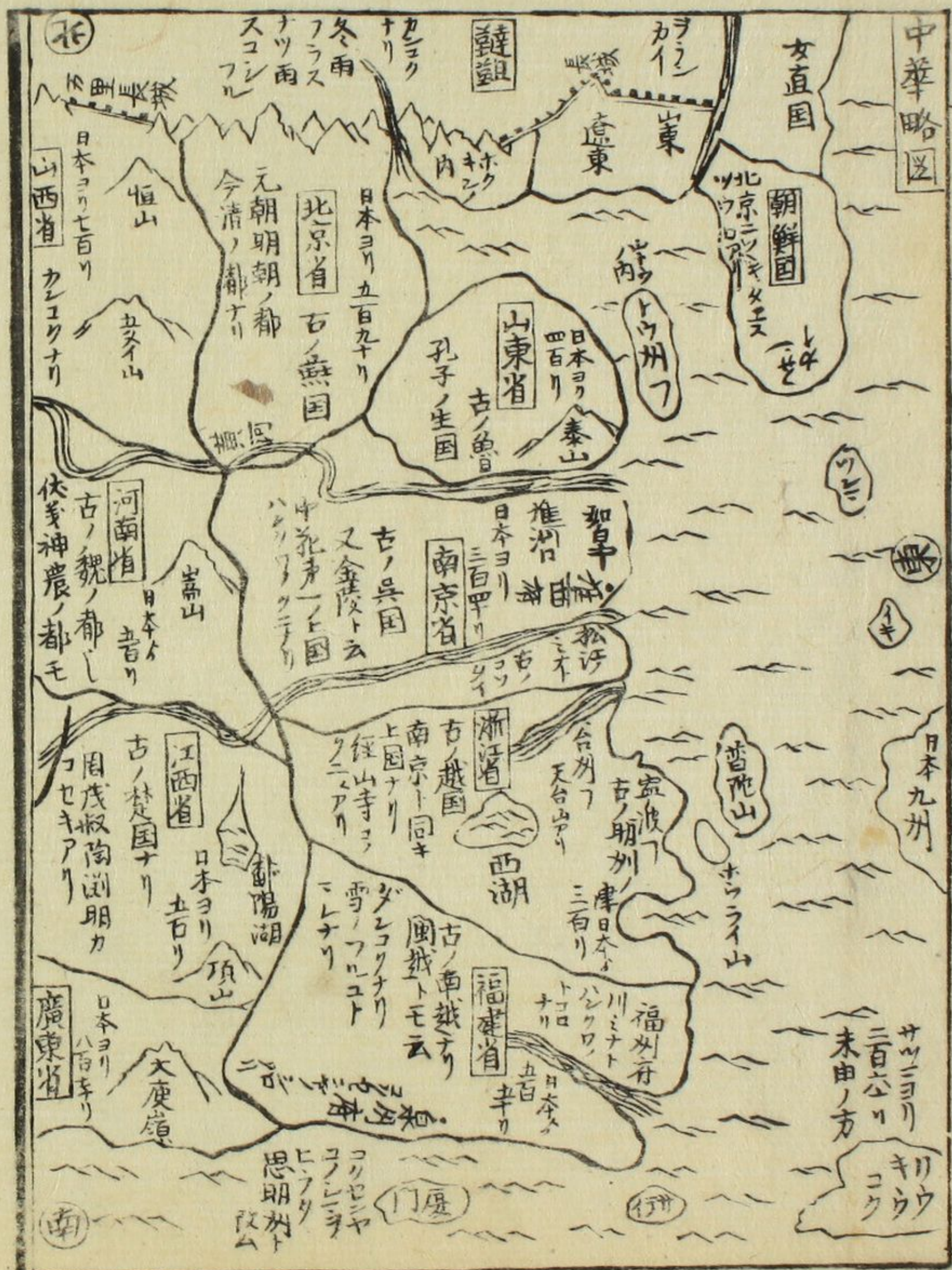
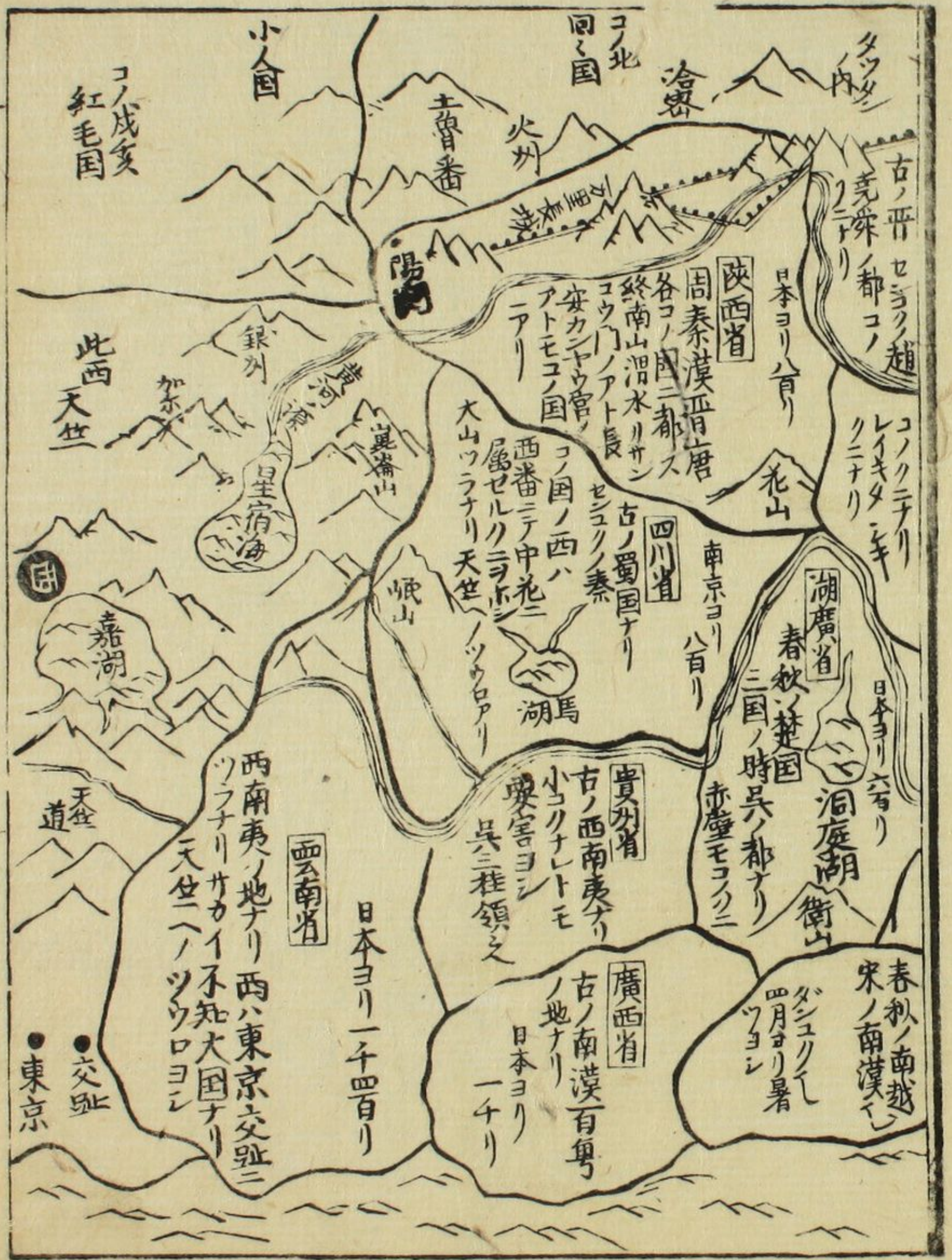
### 凡そ深を唐へやるしるす月

涼波奇 辛酉

○古今集 羅羅奇とある月と云へてよきゆの五倍仲た  
あふの系よりしりて凡そかきとある之等のこと一八月と  
はるし 仲冬と号す 凡そかきとある之等のこと一八月と  
あふの系よりしりて凡そかきとある之等のこと一八月と

○新古今集 多しすも人やまらんるこの形も  
乃らりし月の形のもの

○事物紀原云 天地開闢萬八千歳而盤古死 帝王五運  
歷年紀日盤古死後左目為日右目為月  
○釋名云 月行有遲疾其極遲則日行十二度強其極疾  
則日行十四度半強其遲極漸疾疾極漸遲二十七日半  
強而遲疾一終矣





乞と課傳授とく今し。肖拍、具平親王の齋し久我、苑に在りて  
 派と氏と、和奇と嗜と多登と華夷にわく、曾て牡丹乃  
 奏と作、時の人奇絶と、それより牡丹苑と稱す、古今某の真成  
 以宗、祇法師より傳ふ又一休和尚に謂して、心要と究む、若くは  
 他田、も隱きて四時花と、花牙裁と、酒と嗜と、香と乞と、花と  
 多の道と乞と乞と乞と、自う記と、花一時後、拍原帝、後には文帝  
 後、赤門院と連歌、一話、小傳に肖拍あり、く句と獻、帝、若くは  
 て、帝、若くは天杯と酌、一物して、乞と乞と、拍、干時、永正七年六月十  
 三月の夜、百句、速子、就、實際、終、一、祥僧、周、轉、記、と、傳、言  
 ○牛、八、耳、鬣、く、鼻、と、乞、と、聞、く、腫、ハ、堅、子、あり、齒、ハ、下、に、あり、て  
 上、よ、た、く、三、歲、の、一、二、齒、あり、四、歲、ハ、四、齒、五、歲、ハ、六、齒、し、六、歲、ハ、後  
 毎、手、接、脊、骨、一、節、く、造、化、推、興、見

○榮花物語云、逢坂園ちの住僧、某、万、壽、二、年、大、堂、と、管、と、建、寺  
 中、に、沐、勤、の、像、と、安、置、け、その、材、本、最、も、巨、太、なり、唯、一、牛、あり、て、よく  
 乞、と、運、持、く、堂、址、子、遺、と、り、一、目、人、は、牛、と、俵、り、て、他、の、衆、の、多、ん  
 と、其、其、夜、牛、その、人の、髪、も、た、て、云、我、は、是、迦、棄、佛、く、は、堂、と、か、さん  
 々、と、た、け、身、と、釈、す、何、ぞ、他、事、と、勞、せ、ん、也、と、牛、假、人、發、嘆、して、人、子  
 告、る、れ、を、聞、者、其、緣、と、なく、園、ち、子、入、て、牛、と、洗、ひ、その、ら、佛、の  
 牛、死、た、ん、と、す、り、に、住、僧、象、と、圖、に、洗、ひ、成、て、其、腫、と、點、ま、る、に、お、つ、て  
 牛、つ、ひ、子、死、ス、あ、る、お、つ、て、王、公、大、人、之、如、その、圖、亦、の、畫、と、述、へ、其、禮、  
 洗、淨、時、に、牛、佛、と、稱、ま、矣

初尾花風を亂して尺をくまら 東巴

○は、句、ハ、一、字、の、て、ま、は、ま、の、り、て、倒、台、さ、ら、ん、し、海、子、み、う、と、と  
 とも常くし風をくまらるる尾花ありして風を亂すと云ふか

まことと結倒のうにならうしをてまもの一字大切なり

○詩ノ倒句ハ杜子美

香稻啄餘鷓鴣粒 碧梧<sup>トラス</sup>棲<sup>トラス</sup>老鳳凰<sup>トラス</sup>枝

○和歌ハ菅家冲集に

ちりそ花を草のへり吹くゆへ花をさくぬ山人もな

○俳諧ハ 野々横に馬江むけよおとくき 芭蕉

鶴とや一まゝ麻ぬ夏の月の智 采山

○まゝまゝのまゝにまびくといふまゝと さぬき

ゆめぬ方いぬまゝをむすき風をさくふかといふまゝ

○赤えの百首 ひとりのみまおふわの神尾花

まゝまゝまびくあま風そふく けりりのまを

○和名抄<sup>スラ</sup>草聚生曰薄 万葉波奈須く木 又芒<sup>スミギ</sup> 慧

其花穂とて翻とて地の尾子似たりよめく尾花と名

武州川越

老人の杖とてまゝより更衣 素谷

永徳百首

○志<sup>ス</sup>ち<sup>ス</sup>一<sup>ス</sup>方<sup>ス</sup>の老とまを杖<sup>ス</sup>花深の穂さへある夏夜うら

○美草巻云中細云のりやうとあつげらるまゝとてく

おとひつとて肉のまをまゝ一今よりおんかくかそへり

けるまの穂のひそを杖とてまを杖<sup>ス</sup>花深の穂さへある夏夜うら

竹へきをまゝとてまを杖<sup>ス</sup>花深の穂さへある夏夜うら

○古今集 仁和のまゝのみまに杖りまゝける雨をまの

杖にまゝぬ杖とてまを杖<sup>ス</sup>花深の穂さへある夏夜うら

ちをまぬ杖<sup>ス</sup>花深の穂さへある夏夜うら

杖もあゝぬ杖とてまを杖<sup>ス</sup>花深の穂さへある夏夜うら

杖もあゝぬ杖とてまを杖<sup>ス</sup>花深の穂さへある夏夜うら

漢書

五



○石川文山倚杖

閑寂拾遺芥徑苔清倍滋地偏人跡少樹密日華暹

○山海經云夸父與日爭走道死棄其杖化為鄧林此已見杖矣○費長房投竹杖於葛陂乃化為龍 活法

○神樂 本この杖は杖の杖を天より下りてよおる所の杖なり

未あふ汲よさるあふさく人のちとせつをよきまの杖なり

○鳩杖 杖首為鳩狀老人常用之要不噎シヨクモリ

○禮記王刑曰 五十杖於家 六十杖於鄉

七十杖於國 八十杖於朝

○老 破之集云公列西玉の山巽黎と云い傍ありきり以年い

七十は おきりて尺えらねて石審子そんて六十よりいへ

七十は おきりて尺えらねて石審子そんて六十よりいへ

七十は おきりて尺えらねて石審子そんて六十よりいへ

あつりあつるそとそを赤作らさあふと云ゆるさふの傳り  
しりり七十とあつり二十と云いあつるきか杖いづら云けか下臨

武州川越

雪れよよと申す朝見ゆる葉摘 沾雨

○續千載 いけりともと申人をもつりの伝あつる雪の

さほらふよりよりさつるつひ 大改大尺

○玉葉集 里人乃つるけりし 朝日さね

みよとのいへるあきになり 大綱云る赤

○枕草子云ころい正月三月四月七月八月九月十月十一月十二月

すてかりさうけつひしきあつたけし四月一日い空

のきしきうしきいかなるに世あわるとある人の世う

かうらかひしよけしろひあとも我力もいしひかん

さるさふともあつし七日ハ雷石のころあやうにわつた

そのものめらくらぬとてそのとくさひを 下略

○事文類聚云人日採七種菜作羹

○世説問答云正月の湯の月し又七日の湯の湯の敷くはて期延  
と何れもして私のかにいつてそのとくさひを 下略

○事物紀原云東方朔書曰歲正月一日占鶏二月占狗  
三月占羊四日占猪五日占牛六月占馬七日占人八日  
占穀皆暗明溫和為蕃息安泰之候陰寒慘烈為疾病衰  
耗故杜子美詩曰元日至人日未有不陰時蓋傷時之言  
也推此當由漢世始有其義 ○和名 奈都那

○河海抄云七種芥。鹽蕪。芥。菁。御形。酒。代。佛座

○芥の実ハ三角にして未大ク本窄一三條の條子似る小  
兒の戯しき其二三つを麻と名ある由へ子三條草と名ク

播盆銘

白雲窟沾川

一日唐子西乃古硯銘以熟覽しておしる事あり  
播盆と播木と刷匙ハ蓋氣類欵刷匙ハ銃播木おれり  
亞の播盆ハ鈍一鈍との壽く銃のハ矢一其為用播木を  
最勤刷匙次之播盆ハ静ゆるとの之因茲密子設案より  
刷匙ハうまに板より撰ゆは洗く其體甚弱播木柔なり  
さるる製をてとも日々減る速也播盆三器以内ハ剛とて  
相合しは用ふるに其疆ハ其のむも播木ハ卷子  
しるるに窮氣ハ行は猶を備は災わん播木刷匙ハ弱  
欺とも金鉄ハ以て製ハ三品ハ播盆ハ一ハ播木ハ一ハ刷匙ハ

いふむかやうに能人張やをりその三物交合戸を  
もけくはけいもあぢかき志つゝ觀をいふ常を  
示を鐘よりもゆきりて腹注空しにを論ををりて  
とに去吹風のまもぬく又一物けくも用もやん  
あふれを其剛強柔弱を論をいりて可あらん哉

まもりもらの真初や 義士も 其まもり

泷川自書

是総ハ其文に准く刷匙の壽ハ日と久く計雷木の壽ハ月を以て  
計雷金の壽ハ世城ゆく計の形を述るるこふ三つの黒ハあふか  
ゆふを竈よまらうひ人の肌を移すのまらふ家神の族かゆとい  
劍家神にりて本火土金水を相傳ふ所の黒物ハ是に記さる

祭神ハ則阿須波神

庭中のおとこの神子小宮さうーわれいふ人かえりんをさし  
まらひかきぬの所い猿立子ハは神をまらう

○澤天隱題富士詩

五頃弥外有須弥 呼作士一峯吁 是誰

六月雪飛寒徹骨 攀闕芥子欲藏之

○萬葉集赤人牙 富士の峯にかりをりて雪を

六月乃十五日子滿ぬをその夜零り

○本朝文粹都良香富士山記云富士山者在駿河國峯  
如削成直聳屬天其高不可測歷覽史籍所記未有高於  
此山者也其聳峰鬱起見在天際臨瞰海中觀其壘基所  
盤連亘數千里間行旅之人經歷數日乃過其下去之顧  
望猶在山下蓋神仙之所遊藝也

○義楚六帖云日本國名倭國在東海中秦時徐福將五百童男五百童女止此國東北千餘里有山名富士亦名蓬萊其山峻三面海一朶上聳頂有火烟徐福止此謂蓬萊至今子孫皆曰秦氏一矣

傳中松山

住ぬると葉をかめてく 梅の紅 雲岫

玄陽葛傍の梅其枝地中に入て幹と成幹離れて枝と成  
つゝ十余丈高ぬけあつてておあつておのぬゆるふふ  
よめて助竜梅と稱も進まき 習をみくも こそあられた  
すななほはれぬのと香もつや海 世説の人かき ありの  
茅屋うゝつゝに竹あるまゝも やめてく

○清光嚴院延文沙市首 みるまをいこそひひく人  
我やの朝とのひめとつるこころあ 終院つ

○古今著回云甲治及大物を公何々今表秋の夜つり  
まのしつらしと海せさあけひらり 名あつるともそそ  
秋はきくまもて才一とそとつ治友作 こそを大物  
梅のゆらんへさつる才一とそとつ治友作 こそを大物  
ひめと梅乃備まをりし自余の死のうごらさきにあらは  
るゝ大物云るもとそとつ治友作 こそを大物  
表乃あゆみのる紅梅の影をりあまそとそかきとつ  
されける優りとゆりけん 江記見たり

○鶴林玉露云古者謂實與化不言花美香至宋朝則詩  
文詠之但古梅花不如于後世乎天地氣變易昔有今無  
之類亦多

○梅邊集云表のそらと梅こそをあまけけりよ梅のそら  
あうりかむ宿のらんえとれとあまそとつとつとつた

ちうのひんれをひい入る 陸松  
 拵り者いさるふやなりを凡乃作申し承ともあや吹こぬ  
 ○本朝古者 柳花者 梅也 中古以来唯 柳花者 梅也 三國會  
 ○あつたれとすまふあわりちいせとそつとさういめつと  
 くれとらふそはのほ子肖相云めてくれはあむのそふしとらと  
 ちうとらふめしとらと

川西の杭子 清物れそとらと 采山

○夫木集 法然うとあつたれんのとらと物  
はつとちりうつとほとらと 魚  
 ○鷓鴣 ミツ 和名之萬豆止利 俗云宇乃鳥  
 ○本綱云 善没水取魚 日集洲渚夜 巢林木 父則糞毒也  
 令木枯也 漁舟往 往廢蓋數十 令其捕魚

温泉の作遂やい方の所 永時鳥 南紀 一 瓢

○夫木集 夏二 汗流 羽長  
 夜をかきし物名の小巻のり 守もあや月の心郭云  
 ○堀川院 後百首 魚長 羽長  
 ころわいさるけさ物といふてあまのくに地湯とらん  
 ○狹名野の柳列 川名と都く有馬街 通あつたるま由一  
 ようと有馬の狹名あつたつと温泉水のるる都く  
 ○三代実録云 詔賜左大臣 従一位 源朝臣 信 摂津国 川  
 辺郡 為奈野 為遊獵之地  
 ○新勅撰 藤原の秋 今作 関白有馬乃陽 滅るるまよりあ  
 乃と秋のそとあつたつと長家  
 神鳥の柱のあつたつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと



郭云侍繩世々唐乃夜

沾室

○拾芥抄云唐申夜誦彭侯子彭常子命兒子悉入幽冥之中去離我身每唐申向寢而呼三其各三尸永去萬福自來○酉陽雜俎云凡唐申日三尸人過云七度唐申ヲ守レハ三尸滅三度唐申ヲ守レハ三尸伏ス

○大平廣記云彭者三屍之姓也常在人身中伺察其所為罪每唐申日告上帝故此夜不寐而守三屍

○朱雀天皇天慶二年丙申何めて唐申の所被ありて文德帝の時智鏡大帥入唐一々修ん

○菅家文草云為客以來不安寐眼開豈寐守唐申

○江吏部集大江匡衡守唐申詩ノ序云夫去三尸學九轉者彼大聖之玄風也

○袋草紙云唐申せくぬる福文

○唐申の夜ぬると三尸とてわき虫人の身中に入り病瘵の病ひをあらふそのゆへ今も月福とるし 古今医統

○拾遺集の云ぬると三尸に齊文の唐申一ゆかり松風入夜琴とる人歌よのあり 琴の音も唐申の松風かあり

○唐申の夜ぬると三尸とてわき虫人の身中に入り病瘵の病ひをあらふそのゆへ今も月福とるし 古今医統

○庚申詩 二句

年長毎勞推甲子夜寒初共守唐申 許渾

已酉年終冬日火庚申夜半曙光遲 管

○荒木田守武の世中百首の縁あり悉く世中の五をよむ巻軸に世中の天永五年長月のものなるに夜百そよむなり

○十干ハ幹ハ十二支ハ枝ハ木の旁に生るものを枝と云正

出<sub>レ</sub>者<sub>ト</sub>轉<sub>レ</sub>ル<sub>ル</sub> ○運氣論云滑陽ハ天ト爲<sub>テ</sub>五行ヲ彰  
テ十于五<sub>ツ</sub>濁陰ハ地ト爲<sub>テ</sub>八方定リテ十二支分ツト云<sub>ク</sub>  
○琅耶代醉ニ用修云古ハ術數ニ又卅六禽アリ蓋辰  
毎二三世是ヲ知人必<sub>レ</sub>凡子ハ鼠ナリ蝙蝠燕之ニ屬ス  
巳ハ黄牛ナリ水牛兕牛屬之寅ハ虎也豹龜屬之卯ハ  
兔也狐貉屬之辰ハ龍也蛟虬屬之巳ハ蛇也蚓蛄蟾屬  
之午ハ馬也鹿獐屬之未ハ羊也麋豺屬之申ハ猿也猴  
狢屬之酉ハ鷄也雉烏屬之戌ハ狗也狼豺屬之亥ハ豚  
也蒿猪也ト云<sub>ク</sub> ○此三十六禽ハ地子配する<sub>ル</sub> 三十六の數ハ  
二四六八十の陰數を合<sub>ス</sub> 三十<sub>ノ</sub> 是に坎水の六<sub>ト</sub> 加<sub>テ</sub> 三十六<sub>ト</sub> 凡  
大辭子<sub>ノ</sub> 是<sub>レ</sub> 羽<sub>ノ</sub> 有<sub>ル</sub> 以<sub>テ</sub> 禽<sub>ノ</sub> 之<sub>レ</sub> 一<sub>ト</sub> 三十<sub>六</sub> 禽<sub>ノ</sub> 中<sub>ニ</sub> 多<sub>ク</sub> 獸  
虫象<sub>ヲ</sub> 強<sub>ク</sub> 多<sub>ク</sub> 禽<sub>ト</sub> する<sub>ル</sub> の<sub>レ</sub> 多<sub>ク</sub> あり<sub>ト</sub> 凡<sub>レ</sub>  
○白虎通云禽鳥獸ノ總名ト云<sub>ク</sub>

耳に初音月さへ鼻さへひめの花

壽躰

一句に六根<sub>ト</sub> 傳<sub>レ</sub> 小<sub>ノ</sub> 梅<sub>ト</sub> とい<sub>へ</sub> とも自然<sub>ト</sub> 口<sub>ノ</sub> 破<sub>キ</sub> 味<sub>ハ</sub> 知<sub>ル</sub> 一  
魏<sub>ノ</sub> 曹操<sub>ト</sub> 梅<sub>山</sub> とい<sub>へ</sub> する<sub>ル</sub> 時<sub>ニ</sub> 平<sub>水</sub> 子<sub>ノ</sub> 唱<sub>レ</sub> け<sub>レ</sub> 時<sub>ハ</sub> 彼<sub>ト</sub> 越<sub>カ</sub> 六  
あ<sub>ら</sub> じ<sub>に</sub> 梅<sub>子</sub> あり<sub>ト</sub> とい<sub>ひ</sub> て<sub>レ</sub> 口<sub>中</sub> 々<sub>々</sub> 傳<sub>レ</sub> せ<sub>る</sub> 多<sub>ク</sub> あり<sub>ト</sub> され<sub>ル</sub> 者<sub>ハ</sub>  
方<sub>子</sub> 實<sub>ニ</sub> あり<sub>ト</sub> 一<sub>ノ</sub> べき<sub>ト</sub> とい<sub>へ</sub> 是<sub>レ</sub> 別<sub>ニ</sub> 意<sub>ニ</sub> 梅<sub>ト</sub> され<sub>ル</sub> とい<sub>へ</sub> 合  
せ<sub>る</sub> 如<sub>ク</sub> 被<sub>レ</sub> 傳<sub>レ</sub> 一<sub>ノ</sub> ○古今集 よ<sub>ク</sub> 人<sub>ノ</sub> 一<sub>ノ</sub> 一<sub>ノ</sub> 凡<sub>レ</sub>

梅の<sub>レ</sub> 初<sub>ニ</sub> 咲<sub>ク</sub> 時<sub>ハ</sub> の<sub>レ</sub> 芳<sub>ハ</sub> あり<sub>ト</sub> 梅<sub>ト</sub> する<sub>ル</sub> もの<sub>ノ</sub> 一<sub>ノ</sub> 人<sub>ノ</sub> の<sub>レ</sub> 芳<sub>ハ</sub> 大<sub>ニ</sub>  
○借<sub>レ</sub> 馬<sub>ノ</sub> 樂<sub>ト</sub> お<sub>も</sub> や<sub>ま</sub> を<sub>レ</sub> 吹<sub>ク</sub> とい<sub>へ</sub> たり<sub>ト</sub> なる<sub>ル</sub> 梅<sub>ト</sub> の<sub>レ</sub> 芳<sub>ハ</sub> 一<sub>ノ</sub> 夜<sub>ニ</sub>  
二段 芳<sub>ノ</sub> の<sub>レ</sub> 芳<sub>ハ</sub> 一<sub>ノ</sub> 夜<sub>ニ</sub> を<sub>レ</sub> け<sub>レ</sub> や<sub>梅</sub> の<sub>レ</sub> 芳<sub>ハ</sub> 一<sub>ノ</sub> 夜<sub>ニ</sub> あり<sub>ト</sub> 也<sub>一</sub>

○梅花詩 東坡  
春來<sub>ニ</sub> 幽<sub>谷</sub> 水<sub>ノ</sub> 潺<sub>々</sub>  
一夜<sub>ニ</sub> 東<sub>風</sub> 吹<sub>ク</sub> 石<sub>ノ</sub> 裂<sub>ク</sub>  
的<sub>ニ</sub> 皚<sub>ニ</sub> 梅<sub>花</sub> 草<sub>ノ</sub> 棘<sub>ノ</sub> 同<sub>ク</sub>  
半<sub>ニ</sub> 隨<sub>テ</sub> 雪<sub>ノ</sub> 渡<sub>リ</sub> 関<sub>ノ</sub> 山<sub>ヲ</sub>



○六根清淨大教

目仁諸乃不淨乎見天心仁諸乃不淨乎不見  
兼俛云眼見色而眼不見之其所以見之者神也  
耳仁諸乃不淨乎聞天心仁諸乃不淨乎不聞鼻仁諸乃  
不淨乎嗅天心仁諸乃不淨乎不嗅口仁諸乃不淨乎言  
天心仁諸乃不淨乎不言身仁諸乃不淨乎觸天心仁諸  
乃不淨乎不觸意仁諸乃不淨乎思天心仁諸乃不淨乎  
不想白衆各念也 給階 下略

▲二根清淨大教ハ天兒屋根命十九代常盤連乃撰ル也

○莊子云今吾告子以人之情目欲視色耳欲聽聲口欲  
察味志氣欲盈ヲヲ失

○存捨遺集 心もくち少くもよりくくひすの由る  
とら絲ハくふそきくけり 大中長徳宣

鳴滝の世はもく油のぬほくるる糸 也川

上録ニイナ里 高橋

○うき世のさかきぬほほゆる身も世と違はくは本の  
深坤くうくとのハ水鶴のゆきくきく山水と友く一螢子  
月をかくさ光おびに耳とよるくくく清貧ハははに  
ぬほくく濁富ハ憂おほくくと独土稚子とたきく一瓢の飲と設  
○新族古今世のさかきぬほほゆる身も世と違はくは本の  
○論語子貢曰貧而無諂富而無驕何如子曰可ナリ  
○景行錄云知足可樂多貪則憂知足者貪賤亦樂不知  
足者富貴多憂知足常足終身不辱知足常止終身不耻  
比上不足比下有餘若此向下心每有不足者 矣  
○山谷曰樂從不求莫樂耻從多欲豈耻亦賢人可思哉  
君子居安如危小人居危如安

○埤川百首 水々れよ草花居ハ朽とんと  
 浮くらとかなたそと一一くりある 匡房  
 ○室沼百首 ふあまきたさるく底白雲はひ  
 ぬらりまうのひとひんぼう 柳翠  
 ○螢 蝕群邪明目蓋取其照幽夜明之義耳  
 ○草山集鳴瀧大黒堂記云造鳴瀧造三空寺向晚渡西  
 谷昇大黒堂堂前有亭亭遠近皆山也其前者名立智山  
 山下有巖曰獅子巖有憶庐山之一勝也鶯共西而白雲  
 往來愛太子山也列其南而如展畫屏者嵐山也前有  
 小峯參差如人之左社也其間蔚然而幽邃者法輪也下略  
 ○唱滝ハ後縁仁和寺の奥双岡の山に細き流川にさるる為  
 よハわかれ ○後拾遺集 吟流や西の川流よみえさ  
 せんんそとす流も 秋やらうたくと 俊成

旅行

柳乃々々々々々々々々々々々々々 更登

○新古今集 道のへま志る山なるや 柳乃乃

志るくくくくことととよりそれ 西行法師

○たのまの柳ハ奥列野列のさかい獲明神のまをき野と云  
 むまやらのたの傍にあり温泉大明神のまをくらたまあり西行の  
 歌よりまをまのまをとなりたりけ柳をまのまをき野のまを  
 けりまのまをき野のまをき野のまをき野のまをき野のまを  
 けりまのまをき野のまをき野のまをき野のまをき野のまを

○西行法師ハ俗名佐友共衛尉藤原憲清ハ云友原季孝御  
 九世武衛尉藤原信通の子鳥羽法皇の少西の衛士ハ弓馬よ  
 達ハ管絃和歌と善以て名を絶一出家ハ号園位ハ西行  
 家僕も円ハ云友原ハ西行と号おはして諸國を周遊

曆見の世よりして和帝と録す関東を越へて時遠江國天龍の後  
に於て其の如く其人等より此れを信ぜず下りて云々時西の使  
僧の常なることひて退る一人怒り西の頂を知り血を流す  
あり少く憤れりまき舟より下り西住とて入て恙りて位  
時西の如く故を由りぬる事ありしを知らずして  
おもふなり何れを夢や汝の信ありしを知らずして  
より西住とて御して独り御して其れより強き人頼城公  
おもふ如く管中より入り和帝又弓の道成回りむ退出の時銀乃  
猶と御し御受しと出り門外の懸籠りありとて去ぬ  
○東鑑云文治二年八月十六日午、尅西行上人退出頻  
錘抑留敢不拘之ニ品以銀作猫被充贈物上人乍拜領  
之於門外与放遊嬰兒云云  
二之終

人家求置重寶成書目錄

早引正字通

大本増補 全

真字書引ニテ字ヲ見ルニ甚早レ是ニヨッテ  
早引ト題ス早キ字ノ引ヤウ未多右ノ本ヲ見  
テ知ルニ與ニイ只引四躰千字文其外文字ノ  
要用ヲ集メノス

西療衆方規矩

全一冊 藥籠本

藥方加減等ヲ委多記ス道三先生治療ノ  
書ナリ。医人ニアラスレテモ此書ニヨリバ病家ニ  
アヤマチテ違等ナカルベシ

印判秘訣

全一冊

判ハ人々大切ナルモノニテ是ニヨッテ一生ノ禍福備ルニヨ  
リ委多コレヲサテレ叙迦ノ印ヲモ圖シテスベテ印判ノ  
吉凶ヲ弁ズ

大日本道中行程細見記

折懐 中本

西ハ朝鮮ヨリ東ハ蝦夷松前ニテ國々ノ道中付御  
大名方知行高井御紋、御定ノ駄賃附名所舊跡  
神社仏閣等モラサスレルコトヲ見レバ日本國中ヲ  
メダラスレテ順覽スルナリ

急用間合即座引ハ字ヲ引ニ至テ早キ本  
故ニ發行スルノハメヨリイタ年月ヲ歴ザレ大  
ニ世ニ行レテ印板既ニ磨滅ニ至レリヨッテ此度  
字數ヲ廣大ニ増益セラ更ニ字ヲ引ニ至テ速  
ニ煩レカラサル法ヲ工夫シテ新ニ監刻シ普ク海  
内ニ布ク其題号ヲ革ムルノ左ノ如シ

大成正字通

全部七冊 合爲一本 懷中本

右ハ神書、和書、儒書、醫書、詩文集、尺牘、歌書、  
連誹、或ハ雜劇、小説、佛書ノ類、諸子百家ノ書、  
數千部ヲ集メ其中ヨリ用フベキ字ヲ抄シテ  
コレニ音訓、又ハ訳ヲ副テ新ニ撰シ大ニ増補スコ  
レニテ印行ノ字引多トイヘ此書ニ較レバ十ノ  
一ニモ及バサルハ一門部ニテ御見クラベナサレ  
候テモ分明ニ知レ申候コレニテ字ヲアツムル  
コレニテノ字引ニ十倍シテ雅俗日用ノ切要ヲ  
不洩ルヲ知レ和漢ノ字ニ志シ詩文尺牘和歌連  
誹ヲ作ルハタヒ達人トイヘコレヲ蔵テ失志ニ備ヘ  
其字ヲ引ノ速ナルト増益ノ趣ハ別ニコレヲ記ス

